

健康万歳 ㊟ 笑う門には健康が来る

私の同門の後輩にAさんというとてもユニークな人がいる。彼は昭和43年私がまだ八女民生病院の医師だった頃、出張で来て貰った非常勤の若手医師であった。落語と言う珍しい趣味を持ち、「高座で古典落語を語るのが夢だ」と常々話していたのが記憶の底に残っている。
単身赴任の彼を我が家に食事に誘ったことが数度あったが、その度に持参の扇子で私ら夫婦とまだ幼かった二人の娘を聴衆にして「十八番」の古典落語を披露してくれていた。

あれから50年が経った。ふと同門誌のなかでAさんが寄稿された「笑い医療」という文章を読み、当時を思い出し感慨深いものがあった。

郷里で開業の傍ら65歳の時に落語家4代目春雨や雷蔵師匠に入門、しばらくは「笑いの落語家」として二束の草鞋で活躍したが、3年ほど経ち医院も廃業し噺家一本で活躍、70歳で念願の真打に昇進した。今は高座で多忙を極めている。医師免許を持ち落語家として活躍している人は、古今東西類を見ない気がしている。

少し前段が長くなった。近年社会が大きく変化し、対人関係が不器用になったと聞く。スマホの影響で想像力や創造力が欠如しているのも確かだ。

最近「笑い免疫」の研究をしている学者も多い。笑いが免疫力を上げ、血糖値、血圧、血中脂肪の数値も間違いなく改善される。作り笑いでも良い、生活習慣病やがんにも効果が期待される。

日本人は昔から人前で表情を崩したり、大声で笑ったりするのは「はしたない行為」だと蔑まれてきた。女性の方がよく笑うのでそれだけ平均寿命も長いとの証言もある。

医師と患者の間で会話も少なくなった。マニュアル通りの検査や治療、コンピューターを覗き込むばかりの説明では、血の通わない医療不在と言われても仕方あるまい。

今は「笑いの療法士」として資格分野も拓けているらしい。医療の中に「笑い」を取り入れていくのも患者と親しみも湧き、新しい治療法として見直されて良いと痛感している。

林 栄一 (立花町・医師)



八女市稲富 伊藤 清人

連日の酷暑にもめげず、毎朝凜として咲く朝顔、小生もその姿を見習いたい。
クーラーの効いた部屋で、熱中症になるのを良い口実にして、毎日無爲に過ごす今日この頃、誠に恥入るばかりだ。

平々凡々のこの絵も、先生の手にかかると一段と位上げのする絵になる。色の濃淡、陰影、メリハリを考えてどのように描き上げるかが課題である。奥はどこまでも深い。要は下手な絵しか描けないが、皆さんと一緒に楽しみながら歩いて行こう。

私が運転免許を持たないワケ その3

80代のお婆ちゃんでも車を乗りこなす肥後の地で、私が車の運転免許を持たないと言うと、またどうして...?という顔をされる。フリーのコピーライターとして東京で暮らしていた時、車を持つことなど考えたこともなかった。買える懐具合でもなく、電車、バス、地下鉄等、東京では移動する乗り物に不自由はない。

ところが60歳を過ぎてから、状況が変わった。福岡で教師をしていた父親が薬害で倒れ、失明して寝たきりになったのだ。母親だけでは手が回らずに、弟夫婦が父母と同居して家事一切から看病までしていた。食事作りから排便の世話、身体の清拭などなどで外出もできない。一年以上も続くと悲鳴を上げて、「兄貴、代わってくれないか...」と言いつつ出た。長男としては「よし、代わろう」と言わざるを得ない。帰郷となれば、真っ先にやらなければならないことがある。自動車の運転免許を取ることだ。私は嫁の洋子に免許を取らせることにした。田舎の集まりに酒はつきものである。酔った人たちは、ほとんど車を運転して帰途に就く。酒気帯び運転に寛容な時代だった。自分の弱さを知っているから、免許を取れば酒気帯び運転は間違いなくする。

酒を飲めない洋子に免許を取らせる...そう考えた。酔った私は助手席で居眠りしていればいい。そう考えたのだ。洋子に運転免許を取らせて、福岡で中古車を買った。私のたくらみは見事に成功した。洋子は私の専属運転手となっている。爺さんは加齢で酒量がぐんと落ち、素面つまらなそうに乗っている。

前田 哲太郎

籐編みによる花かご作り

八女農業高等学校

生活科学科3年生は6月、社会人特別講師招聘事業で籐編み講師森久美子先生をお迎えし、「籐編みによる花かご作り」について勉強しました。直径2.5mmの1本の細い籐から完成した花かごを見て、最初自分にもできるのだろうかという不安もあったようですが、講師の先生が生徒一人一人に丁寧に指導され、生徒たちは時間が過ぎるのも忘れるぐらい熱心に編みあげていきました。伝統的な籐編みという物作りの大切さを学び、完成した時の喜びや達成感を十分に味わうことのできる有意義な事業となりました。

(生徒の感想紹介)

●材料の籐が日本にはなく、100%輸入されていると聞き驚きました。一本一本編んでいくことができるのか不安でしたが、慣れてくると意外と簡単でした。編む人が違ってもかごのできあがりや違い、とても面白いと思いました。今回籐について知り、籐編みの楽しさを学ぶことができ、将来は他の人に伝えていけたらいいなと思いました。(立花中学校出身 牛島 瑠那)

●籐を初めて見たとき、こんな細い籐でどのようなかごができあがるのかとても楽しみでした。先生の手本のかごを見て簡単にできると思いましたが、編み始めるとうまくできませんでした。友達と協力しても先生のようにうまくできません。しかし編んでいくうちに自分が好きな形に変形させたりするのが楽しくなり、集中していました。完成したときには自分で作り上げたという満足感で胸がいっぱいでした。次は籐を色染めして作りたと思いました。

(筑後中学校出身 西野 沙羅)



(八女農みらい館 9月販売日程)

9月5日(火)、8日(金)、12日(火)、15日(金)、19日(火)、22日(金)、26日(火)、29日(金) 販売時間は、10時30分～15時30分です。多くの皆様のお越しを心からお待ちしています。

恋する フジバカマ

熊野古道を訪れる人が快適に歩けるようにと、近くの古道の草刈りや修復、道標の整備をしておられるご夫婦をテレビで拝見した。

お二人は又、古道脇の休耕田に毎年、藤袴の苗を植えておられる。旅する蝶、アサギマダラを呼ぶ為である。もちろん自費で。

夏、南の島から海を渡って飛来するアサギマダラは、藤袴の花がお気に入り。秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七種の花

万葉集に山上憶良の詠んだ秋の七草の歌がある。藤袴は秋の七草のひとつ。秋の庭を彩るお馴染みの萩とは違い、藤袴は近年自生できる野草が少なくなった為、準絶滅危惧種に指定されている。

中国では「香水蘭」と呼ばれ匂い袋に。日本でも奈良時代には薬草として使われた。キク科の植物で乾燥させると桜餅の葉っぱのような匂いがするとのこと。

この匂いに女性は惹かれると言うのだから何とも興味深い。アサギマダラの命は羽化して五か月。その間二千キロもの距離を飛ぶ。

今年もあのご夫婦の育てた藤袴の畑で乱舞するアサギマダラの姿に、古道をゆく人々は癒されることだろう。

一年三百六十五日の其々にふさわしい花があると言う。藤袴は九月二十五日の花。花言葉は、ためらい。躊躇。優しい思い出。言葉から浮かぶのは切ない恋。

一年に一度渡り来る蝶を待つ藤袴にぴったりである。

夏生